の一瓶原宮から東への大橋。恐らくはこれは短かい橋で、甲賀郡信樂への街道、三は泉橋、今の木津から上狛への間にかゝつてゐたもの（現在は鐵道の橋梁）があつたのであるが、水路の利用が著しかつたことは右の文の兵庫器仗の運道によつて證される。果して然らば東西水路の便にかぬるに、東北近江國から東國に通ずべき要衝が、こゝに都を移された主要の原因であつたと考へてよいらしい。しかし今日では大橋のみしか再興されてゐないが、後年都を京都に奠められた後といへども、この奈良から信樂への要會であつたこの川の橋は、宇治橋や山崎橋と同樣に、國家の手を以て永く架橋されたものである。

延喜式雜式に曰く

凡山城國泉河樺井渡瀨者、官長率二東大寺工等一毎年九月上旬造假橋、來年三月下旬壞收、其用度以二除帳得度田地子稻一百束一充レ之

とある。假橋で半年間だけしかかゝらなかつたとしてもその重要視されたことは疑を要しまい

時に盛衰があり世に汗隆はある。山代の鹿脊山際に、宮柱ふとしきたてゝ高知らす布當（フヂギ）の大宮川はまもなく國分寺に給附されたけれども、この地永く皇室の庇護に浴し、德川時代を通じて猶、禁裡御料であつた。蓋し地理はさうかはるものではない。大地の自然が人文に及ぼす影響は悠久であるからである。

かうしたことは其折々の思ひ出である、後日の左券に記しておかねばならぬと思つて本誌の餘白を汚した。（完）（昭和三年十一月）

新著紹介

○本邦溫泉論考　石川成章著　四六版二一四頁　寫眞版

九葉　古今書院發行　昭和三年十一月　定價一圓六〇錢

瀟洒な釘裝で、人の心を惹く書名を以て發刊された本書は著者の多年の溫泉に關する調査を一册に纏められたものであつて、溫泉を學術的に論考した本邦唯一のものと云つて好い本書は必ずしも本邦の有名であるあらゆる溫泉について論考はしてないが、本書を通覽すれば日本の大抵の溫泉の眞相を推知し得られると考へられる。なほ溫泉の試掘に關する一章

を精讀すれば新しい溫泉を必ず得られる眞諦を體得することが出來る。然かも鑛物學者にして佛教學者たる著者は有樂に各章に於て鑛床を忘れず、卷末には溫泉と佛教の一章があることは他人の克くすることの出來ぬ所である。紀伊湯崎溫泉の一章は卷中の最長篇で該地に於ける溫泉探掘の秘傳までも公開してゐるのは書物の售價の安値なのに對して甚だ慈惠的である。この一章を少く批判して見るならば、本書が案内記ではないことは勿論のことではあるが、紀勢西線が三四年前の箕島で止まつてゐたり、勝浦急行の美しい姉妹船那智丸牟婁丸の噸數が千六百噸となつてゐないなどは溫泉論考として價値を少しも下げはしないことである。たゞ湯崎半島の地形を論ずるに當り北方の低丘と南方の高陵とを分つたのは眞實であるが、其の間に北落の一大斷層（湯崎斷層）の存在までにこぎつけず、然かも此の東西行の斷層がこの溫泉の眞の生命であるに論考しなかつたのは地質學的にも溫泉學――もしかゝる學問がありとすれば――上にも點睛を缺いた憾みがある。溫泉のみに執着せずに溫泉地四近の風光を述べ湯崎附近では略同樣な多くの寫眞版を入れたのも一般人に執つては親しみのある編纂振りである。猶ほ卷末には本邦溫泉の論著目を附してあるが震災豫防調査會報告中に出たものを擧げてないのは瑕瑾である。（N）

○武家時代社會の研究　牧野信之助著　刀江書院

昭和三年十一月發行　定價五圓八十錢

畏友牧野信之助君は京大國史科を出られた先輩である。福井縣史や滋賀縣史に於て、その手腕を天下に示めされ、今は堺市史編纂に從事してゐられる篤學の士である。本書は同君がさうした編輯の間に得られた地方資料により、史家としての敬虔な批判的態度と同情とを以て、我國武家時代の社會相を解剖せんと試み、且つ之に成功された近來の快著である。論證すべて據る所を明にし、しかも行文流暢、一句を苟もしない點に於ては、これ全く同君の眞摯な學的良心のひらめきと申て過言ではない。

地理學を學ぶ人にかうした本の題目は餘りに緣が遠いかもしれぬ。しかし予は本誌の愛讀者に對し大きな聲で呼びかけたい。蓋し本書にはその第二篇に特に土地制度や聚落問題に關する研究があり第一篇法制史經濟史、第三篇時勢及社會相のいづれに取り入れられた各章の中にも、讀者を啓發する所決して尠からぬものゝ存することを知るからである。

本書の土地や聚落研究の中には太閤檢地の研究、割地起原論、越後の地割、村落別の發達、對馬の土地制度、加賀藩の散居村落、受負新田の事等がのべてあるが、いづれも確實な古文書を根據に誠に丁寧詳密に說いてある。予は本書によつて太閤檢地の實際の秘書を學び、割地の發生時期が戰國時代の末葉迄に進め得らるゝことや、加賀の散居村落が東大寺墾田當時からの遺制であらうといふことの肯定說を學んだ。予の管見に於ては同君のこの割地については、かうした日本の實際から更に支那や朝鮮に於ての割地や散居村落の分布を合せて一瞥する必要があることを信ずるものである。從つて遠

からずこの點に關して著者の叱正を仰ぐつもりであるが。こゝでは著者に學んだことの多かつたことを告白して感謝の敬意を表する。いづれにしても本書は人文地理學者のかうした方面の研究に對する一大指針でなくてはならぬ。これ予の敢て江湖に推奬する所以である。（藤田）

○富士の信仰　井野邊茂雄著　古今書院　淺間神社藏版　定價四圓

菊版四五四頁、富士の研究第三篇である。我國には奈良朝以前に既に山岳佛教が興起して役小角の活動があつた、しかしさうした西方からの影響を外にして我富士山は、常陸風土記に記されてあるやうに福慈神として、我等の祖先に尊崇されてゐたのである。斯道の專攻家である井野邊氏はさうした祖先の原始信仰と、かの後日の山岳佛教と相まつて後世の富士信仰に發展した道行をいかにも明確に詳密に記述されたものである。淺間神社の歴代の宮司がかうした著述の編纂を企てた美擧が、井野邊氏の如き眞摯の學者の手を俟つて、愈其の美果を結びつゝあるのは誠に慶福に堪へぬ所である。（F）

○富士の動物、富士の植物　岸田久吉、矢部吉禎著　淺間神社藏版　古今書院　定價六圓五十錢

本書は實に富士研究の第六篇であつて、これ又前書と同時に出版されたものであり、石原氏の地質編などと合せて推奬すべき、富士の科學的研究著述である。圖版鮮明、叙述詳密哺乳類からヤスデ、蜘蛛類に至るまで、生とし生けるものゝすべてが出てゐる外に、植物篇ではこれ又あらゆる富士の植物が細叙されると同時に、各方面の景觀に關しての概説、主要植物、比較研究等十章に亙つて論じてある、これ又結構な書物であると感賞するのみではあけぬ、依つて以て登山の栞ともなし、動植物採集の指針とせねばならぬと思ふ。（F）

新著即報

○東洋學藝雜誌　第四四卷一二號　昭和三年十二月　黑鐵の智識（坪谷幸六）

○*The National Geographic Magazine. LIV,6,Dec.*1928.
Falcon, the Pacific's newest Island.(J.E.Hoffmeister and H. S. Ladd).

○*The Journal of Geology. Vol. XXXVI, No.7. Oct-Nov.* 1928.
Meandering in tidal Streams (D. C. Barton)

○*Petermanns Mitteilungen 74.Jahrg.* 11/12. *Okt.* 1928
Die natürlichen Landschaften Nord-und Mittelarabiens. (A. Käselau).
Der Schiedsspruch über die Palmas-(Miangas-) Insel. (M. Langhans-Ratzsburg).

○*Geologische Rundschau. Bd.XIX, Hf.* 5. *Nov.* 1928.
Das Wachstum der Kontinente nach der Zyklus